

関西学院大学新聞

2015年1月30日 第818号



発行 関西学院大学新聞編集部
 〒662-0891 西宮市上ヶ原1番町1-155
 関西学院大学新学生会館3F
 電話：(0798) 51-1181
 E-mail: kgpress2009@yahoo.co.jp

見せつけたチーム力 第69回甲子園ボウル

第69回甲子園ボウルが開催された。関学ファイターズは55-10で東日本代表の日本大学フェニックスに圧勝した。今回で4連続27回目の優勝となった。

昨年12月14日、アメリカンフットボールの全日本大学選手権決勝「第69回毎日甲子園ボウル」が西宮市の阪神甲子園球場で開催された。そして、西日本代表の本学体育会



試合開始直後の両チーム

先にポイントを取ったのはファイターズだった。試合開始後、わずか5分で橋本誠司選手(商・2、背番号40、ランニングバック)が中央を突いてタッチダウン(以下、TD)を決めた。「どんな体型でもTDを決めよう」と思っ

アメリカンフットボール部ファイターズ(FIGHTERS)が55-10で東日本代表の日本大学アメリカンフットボール部フェニックス(PHOENIX)を破り、4年連続27回目の優勝を果たした。

試合後の表彰式で橋本選手は甲子園ボウル最優秀選手賞を、鷲野選手は年間最優秀選手に贈られるチャック・ミズル杯を獲得した。これについて橋本選手は、「昨年はアルプススタンドにいた自分がこ

頂点への“Challenge”

んな賞を取れるとは思ってなかった」と喜びを語った。一方で鷲野選手は、「オフラインやブロックしてくれる人がいなければ走ることが出来ない。みんなに支えられて取ることが出来た賞。感謝したい」と語った。

鷲野選手が述べたように、ファイターズの勝利はチームメイトや関係者の支えがあったからこそ。そしてさらに、彼らの応援に駆け付けた、本学応援団総部和観客たちのお陰ともいえるだろう。当日は気温が低く風も吹いていたが、応援する彼らの顔から寒さは一切感じられなかった。きつとファイターズは応援席に広がる青い絨毯から、たくさんの元氣と温もりを貰ったことだろう。



第1Qで橋本選手が相手を振り切りTDを決める様子

扉の一言

人はそれぞれ事情をかかえ、

平然と生きている

伊集院 静

Colorで魅せた聖夜の贈り物 The 28th K.G. Winter Festa

昨年12月25日、兵庫県立芸術文化センターにて本学応援団総部チアリーダー部ドルフィンズによるイベント、The 28th K.G. Winter Festaが行われた。

ドルフィンズの今回のスローガンは「COLOR」。メンバーのそれぞれが個性という色を出し、一つの作品を作り

- 2, 3面 KGニュース
- 「関西学院賞」創設
- 「新連載」追跡!! S.G.U
- 4, 5面 阪神・淡路大震災特集
- 6面 連載記事
- 7面 K.G. studio
- 8面 留学特集

後半では、伝統あるドルフィンズの力強い応援を披露したほか、応援に駆け付けた野球部やラクロス部などの体育会とのコラボレーション企画や、ドルフィンズOGによるダンスパフォーマンス、小生によるチアなど、様々なプログラムで会場を盛り上げた。



色とりどりの衣装をまとうドルフィンズ

「留学」という響きは、今の現代において特に新鮮な響きを持たないものである。国際化が進む世界で、各国が英語習得に力を入れるようになった。実際関学は留学に力を入れていることと有名である。留学するという選択肢が当たり前の学生生活の中で「留学」に対する意識は三つに分類される。まず、留学に必ず行きたいと意気込む学生。次にそれは正反対の、一生日本から出るつもりがなく留学に関して無頓着な学生。そして、留学に行きたいとは思いますが、行動に起こすまでの勇気がないという学生に分類される。留学に無関心な学生は揃って「英語ができません」と困らないという。確かに日本にいて、日本人とだけ交流するならば困らないだろうが、グローバル化が進む現代でそんなことは不可能に近い。だから、留学まで行かなくとも外国語を学ぶ意識は持ち続けるべきだ。一方、留学への関心はあるが勇気がないという人はとにかく挑戦してみるのが良いのではないか。留学を気軽にできるのは学生の特権なのだから。私は決して留学至上主義ではないが、関学だからこそ与えられている数々の選択肢を、生かそうとしない学生を見る度にもどかしい気持ちに駆られるのだ。



125年目の新たな出発点 「関西学院賞」創設

昨年の12月12日に、本学中央講堂で「関西学院賞授賞式」が行われた。この関西学院賞は「Mastery for Serviceを体現する世界市民」として著しく貢献した方々の功績を称えるために、本学創立から125年の節目を迎えた今年度から新たに創設された賞である。今回は聖路加国際病院名誉院長を務め、関西学院中学部

のOBである日野原重明氏が受賞者に選ばれた。そもそもこの「関西学院賞」とはどのようなものなのだろうか？創立125周年記念事業委員会事務局によると「関西学院が目指すべき人間像として定めた7項目」が選定の背景にあるのだという。その7項目とは「高い識見と倫理観」、「大きな志」、「他者への思い

「Mastery for Service」を胸に

やり、「確立した自己」、「行動力と存在感」、「社会変革の気概」、「世界への視野」を指す。そしてそれら7項目に基づき、関係者は取材の中で「この賞への感じ方、関心は人それぞれであると思うが、関西学院で育ち、巣立っていったOB、OGの中には今回受賞された日野原さんのような方がいるという事を知ってもらおうと共に、その事を誇りに思いながら関学の一員として成長して欲しい」と学生たちに向けてメッセージを送った。



賞状を手にする日野原さんを囲んで

「不審者多発!! 防犯対策を」

本学周辺で女性を狙った不審者被害が多発していることを受け、兵庫県警西宮警察署生活安全課の西山敬介さんに話を聞いた。警察署の資料によると女性に対する声かけ、強制わいせつ、公然わいせつなどを含めた被害件数は西宮市全体で265件(平成26年

11月現在)に昇っており、特に学生が被害に遭うケースが多い。中でも阪急電鉄の甲東園、門戸厄神駅周辺で事件が多発しており、22時以降の遅い時間や早朝など人通りの少ない時間帯を狙った犯行が目立つ。西山さんは「チカンなどの行為者は、状況・タイミング・時間などを見計らい、犯罪が起きる条件がそろった時に犯行に及ぶので、この条件を揃えさせず犯罪者に犯罪の機会を与えないことが大切だ」と話す。具体的な対策としては一人歩きを避け、暗い道を歩く際は時々後ろを振り返り、防犯ブザーを相手にも見えるように所持することが効果的である。また、不審者の目線から見ると、一人で歩いているのはもちろん、歩くスピードが遅い人や肌の露出が多い

人などが標的になりやすいという。さらに電車内でのチカンも頻発している。路上とは違い、人の多さを逆手に取り、誰が行者なのか分かりづらい面がある一方、行為者が乗る時間帯が一定して決まっているので後日捜査で特定しやすいという面もある。これについて西山さんは「その時に声をあげられなくても相談をしてもらえれば、後日鉄道警察隊が車内に乗り込み現行犯逮捕をすることもできる。電車内に限らず、被害に合った場合は再犯防止に繋がるので、出来るだけ早く警察に相談、届出をしてほしい。また、兵庫県警察本部から犯罪情報などを発信するひょうご防犯ネットを活用し、日頃から防犯意識を持ってほしい」と訴えた。

ひょうご防犯ネット

http://hbnp.net に空メールを送信して登録完了(無料)

ひょうご防犯ネットとはあらかじめ設定した地域で発生した犯罪の場所や、周辺の地図などをメールで登録者に知らせるシステムで、防犯対策に非常に効果的である。ぜひ登録し、防犯に役立ててほしい。このように、警察は様々な策を講じているが、肝心の私たちの危機管理意識が足りないように感じる。他人事ではないことを肝に銘じ、これまで以上に防犯に対する意識を高めてほしい。

“命を繋ぐ架け橋”に ～冬の献血週間～

宗教総部献血実行委員会が昨年11月28日に神戸三田キャンパスで、12月1日から5日にかけて西宮上ヶ原キャンパスで冬の献血週間を実施した。両キャンパスを合わせ、受付者数は412人、献血者数は295人であった。今回の献血週間について委員長の能瀬美月さん(神・3)は「冬は関学に限らず全国でも献血者数が少なくなる季節なので、いかに関学が献血に協力してくれるかというところに苦心しました」と話す。



寒空の中、宣伝活動にあたった

どの情報宣伝活動を行った。注射針に対する恐怖心や、感染症の危険性などのマイナスイメージから献血を敬遠する人も多いが、一人の献血によって、多くの人々を病気から救うことが出来る。今回の献血週間に向けて能瀬さんは「今回は来年度の春に実施し、ここでは新入生も迎えての献血週間となります。より多くの方に献血してもらえよう、献血実行委員会一同、精一杯取り組んでいきたいです」と次回にかける意気込みを語った。

劇団狸寝入 公演「チロリンマンの逆襲」 「全員で作りに上げた舞台」

昨年の12月12日から14日にかけて、本学劇研部である劇団狸寝入が、3回生引退公演「チロリンマンの逆襲」あなた家族の残酷喜劇」を行った。会場である旧学生会館2階ママ上ホールには、連日たくさんの人々が詰めかけた。金曜日の朝、ある一家のもとに息子が不思議な女を連れて帰ってくる。そこから物語は始まる。その女の名は「チロリンマン」。一向に会社に行こうとしない父、家族に愛想を尽かし、家を出ていく準備をする娘、学校へ行つたはずの息子、そして平日にもかかわらず、皆が家にいることに

そわそわする母。そんな4人に対し、謎の女、チロリンマンはある逆襲を始めるのだった。今回の公演について、演出の蛸MASASHIと大黒将司さん(文・2)は「脚本は既存のものをお借りしたので、あとは役者陣にしっかり演じてもらうだけだった。ただし、彼らだけに押し付けるのではなく、全員で舞台を作り上げることができたと思う」と振り返った。演出の立場として大黒さんは、稽古をする中で出てきた役者陣の意見を大事にしたそうだ。大黒さんは「演出をする、どうしても考えが固まってしまう、突飛な表現が



出演者のみなさん

生まれにくくなる。役者陣の意見は、そういった弊害をなくしてくれる大変貴重なものだ」と語った。また大黒さんは、取材の中で「演劇は生もの」という言葉を使った。終盤に夕日に照らされるシーンがあるのだが、公演数日前になって、夕日らしさが足りないという意見が出たそうだ。そこで照明にオレンジ色を足すことで、

その女、敵か？ それとも…

そわそわする母。そんな4人に対し、謎の女、チロリンマンはある逆襲を始めるのだった。今回の公演について、演出の蛸MASASHIと大黒将司さん(文・2)は「脚本は既存のものをお借りしたので、あとは役者陣にしっかり演じてもらうだけだった。ただし、彼らだけに押し付けるのではなく、全員で舞台を作り上げることができたと思う」と振り返った。演出の立場として大黒さんは、稽古をする中で出てきた役者陣の意見を大事にしたそうだ。大黒さんは「演出をする、どうしても考えが固まってしまう、突飛な表現が

また大黒さんは、取材の中で「演劇は生もの」という言葉を使った。終盤に夕日に照らされるシーンがあるのだが、公演数日前になって、夕日らしさが足りないという意見が出たそうだ。そこで照明にオレンジ色を足すことで、



全員、一丸となって作りあげた舞台

追跡!! 第1回 SGU「SGU構想が 目指すもの」

前号でもお伝えしたが、昨
年本学は「スーパーグローバル
大学創成支援」事業（通称
SGU）に採択された。今後
このSGU構想によって本学
がどのように変わっていくの
かをシリーズでお伝えしてい
く。今回は第一回目として、
改めてSGU構想の骨格とそ
れを通して学生達にどのよう
に育ってほしいかについて本
学学長である村田治学長にイ
ンタビューを行った。



「本学の理念に基づいてSGU構想を展開する」と
話す村田学長

てきた「学部の垣根を超えた
少人数教育と、スクールモッ
ト「Mastery for Service」
に表されている「キリスト教
に基づく全人教育」であった。
村田学長は「関学はキリスト
教主義を建学の精神とし、創
立時からの米国人宣教師たち
による「国際性」の基盤の上
に伝統を受け継がれ、今の本
学の姿を形成していることに
改めて気づかされた」と話し
た。

また、今回の構想の目玉に
なっているダブルチャレンジ
制度については、「グローバル
競争が進む中で同時に二つ
の事に取り組むくらいのチャ
レンジ精神を、このプログラ
ムを通して育てることを目標
としている」と村田学長は話
す。

また、今回の構想全体を貫
いているコンセプトが「質の
重視」である。とにかく海外
に行けばいい、海外に行く学
生数を増やせばいいというの
ではなく、例えば協定をきち
んと締結した大学を派遣先の
中心にするなど「質」を担保
したものにしたい。そのため他
大学と比べると、留学に行く
学生数の数値目標は控えめだ
が、「質」という部分で高い
評価を得たと村田学長は考え
ている。

さらに、長年国連との間に
築いてきた強いパイプを生か
し、大学院での共同プログラ
ムとして「国連・外交コース」
を創設する点も特徴であると
村田学長は話す。これによっ
て、関学が目指す世界市民育
成、言い方を換えるならば国
際社会に貢献できるグローバ
ルリーダーの育成を目指すの
だという。

では、これらの構想を通し
て学生たちどのように成長
していったらいいかと考えて
いるのだろうか。村田学長
は「一言で表すならば、主体
的に行動できる人間に育って
ほしいと考えている」と話
し、「常に変化していく時代
の中で何も挑戦しないことは
後退と同じことである。新し
いことに挑戦することは怖く
もあり、勇気のいる事である
が、それを乗り越える力を持
ち、そして自分の力で人生を
開拓していく人材になってほ
しい」と答えた。さらに村田
学長は「もっと海外への留学
に取り組んでほしいとも考え
ている」と語った。実際、今
回の構想では年間の留学生の
数を現状の1000人から
2700人まで増やすための
施策や、受入留学生の数を
1000人から1500人に
増やし、また日本人学生と融
合するプログラムを開発し、
「内なる国際化」を推し進め
る計画もあるため、今後その
中で環境整備も行われる。そ
ういった中で、学生達には世
界に羽ばたいてほしいという
のが村田学長の願いなの
だという。

最後に、村田学長は学生た
ちに向けて「今回の採択に
よって、学内に限らず多くの
場面で本学が目指されてい
る。その中には本学を目指す

論説 日進月歩 若者よ 沖縄を守れ

今年で日本は終戦から70
年を迎える。当時の日本で
は、若者がその命を尽くし
て戦った。彼らは何のため
に戦ったのか。守るべき人
がいたから、国のために戦
おうと誓ったから……。そ
の理由は様々であろうが、
一番の目的は日本本土を
守ることではなかっただろ
うか。彼らによって守られ
た本土の象徴的な地である
沖縄県が今、再び他国によ
って侵される危機にある。

今日、中国では沖縄県の
尖閣諸島が中国領土として
地図に明記されている。ま
た中国の学校では「沖縄県
は中国領土である」と子ど
もたちに教えているという。
日本国民にとっては信じ難
い事実であるが、実際に中国

では、子どもたちに沖縄県
は自分たちの国のものでは
ないと教え込ませているのだ。
中国側が意図するところは
何なのか。それは、沖縄県
を本気で中国の領土にしよ
うとしているということだ
である。

昨年11月に実施された沖
縄県知事選挙に、「琉球独立」
を掲げて最初に立候補を表
明した大城浩という人物が
いた。彼は、民主党政権時
代に持ち込んだ自著が政策
として採用され、「21世紀ビ
ジョン委員会」という構造改
革の委員会の評議員になっ
たことから、この構想を堅
持することを明言した鳩山
由紀夫元首相と面識がある。
今後、鳩山氏と連携して独
立を視野に共闘するのでは
ないか。という見方も一部にはある。
鳩山氏が琉球独立を考えて
いるかは不明だが、少なく
とも大城氏は自身の琉球独
立計画を進めるうえで、鳩
山氏の協力を仰ぎたいと目
論んでいることは十分に考
えられる。

SGU採択によって今後、
ますます本学が世界に開か
れた「国際性豊かな学術交
流の母港（Global Academic
Port）」（構想のタイトル）に
変わっていくことは間違いない。
次回以降は、具体的にど
のような新施策が今後本学で
行われるかについて詳しく追
跡していく。

大城氏を始めとする琉球
独立の支持者は、県内・県外
を問わず多く存在する。彼
らの狙いは、「米軍基地撤廃」
と「米軍追放後の中国・台湾・
韓国軍の駐留」だ。「中国が
過去に琉球を侵略したこと
はないが、終戦間際に日本
と米軍は沖縄県民26万人を
虐殺した」というのが彼ら

の主張らしい。日本の本土
を守るために戦った若者た
ちの命は、決して沖縄県民
の虐殺のために失われたの
ではないのかもしれないが、
このような考えが中国の世
論と合わされば、琉球独立
そして中国領土にすることに
目指した運動や革命が、現
実のものとして浮かび上が
る。沖縄県が中国領土であ
るといふ教育を受けた子ど
もたちが中国の政治を請け
負う時代になったとき、い
よいよ沖縄は脅威に晒され
るのではないか。

さらに、主婦の間で人気
を博しているカタログ通販
雑誌の『通販生活』では、
2013年春号の読み物と
して「沖縄は日本から独立
した方が幸せなのではない
か。」という特集を掲載して
いる。「独立のすすめ」は
本誌の本意ではありません
と特集内では書かれてある
が、4人の琉球独立を推奨
する記事が掲載された。こ
の雑誌のように、様々な方
面で琉球独立を支持する声
は広まっているのだ。

ここまで、中国側や一部
の琉球独立を擁護する人々
を非難する内容になってし
まったが、果たして彼らだ
けが問題なのだろうか。事
実は違うことを子どもたち
に教えることも問題ではあ
るが、この現状を知らない
という我々にも問題はある。

阪神・淡路大震災から20年

「あの日の記憶を追って…」

「あの日」が今に語りかけていることと

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から20年の時が経った。兵庫県南部を中心に未曾有の被害をもたらした震災を「当時」「今」「これから」の視点で見つめなおす。

も起こった。阪急門戸厄神駅では電車が倒壊するという事態までもが発生していたという。

～鎮魂の祈り、捧げられる～ —震災チャペル—

甚大な被害に対し、本学は校舎を緊急の避難施設として開放し、教職員や学生などが協力してボランティア活動などの対応を行った。多くの人々が身近な人や帰る家を失い悲しみに暮れる中、本学関係者の自発的なボランティア活動は多くの人々に希望の光を与えた。

神田氏は「阪神・淡路大震災

2015年1月7日、本学のランパス記念礼拝堂で阪神・淡路大震災記念合同チャペルが行われた。総司会の神学部教授神田健次氏を中心に、チャペルに参加した多くの人びとが犠牲者達に向けた追悼の意を表した。

阪神淡路大震災では本学の学生が15名、教職員・理事8名が犠牲になっている。

甲東園・仁川などの本学周辺の地域の家屋は多数倒壊し、土砂災害などの二次災害



震災チャペルの様子

生に対する誇らしい気持ちや言葉を述べた。今回の震災チャペルに多くの人々が参加し続ける限り、震災の痛みが忘れられることはない。本学の学生として震災で人々が受けた痛み、そしてその中で見出した希望の光を忘れないためにこの震災チャペルの伝統を次の世代へと受け継いでいかななくてはならない。

災でボランティア活動に奉仕した学生たちは、決して自分たちへの見返りを求めて行動したわけではない。目の前で悲しむ人々を見たとき、「自分たちに何かできることはないのか」という、いてもたってもいられない思いから自発的に行動を起こした」と学生たちの行動を称えた。「彼らの行動は関学のミッションである『Ministry for Service』に通じるものがある。彼らは決してこれを意識して行動したわけではない。しかし悲しみに暮れる人々に手を差し伸べる彼らの行動を見たとき、ランパス学長の思いは確かに受け継がれていることを実感することができた」と本学の学

～「ボランティア」から阪神・淡路大震災を考える～ —社会学部 関 嘉寛教授—

20年前に発生した阪神淡路大震災では、多くのボランティアが被災地で活動に当たった。「ボランティア元年」と呼ばれ、その後の災害ボランティアの源流となった

が、具体的にどのような特徴を持っていたのだろうか？今回、我々はボランティア関係の研究を行っている本学社会学部教授である関嘉寛先生に話を聞き、先生自身の震災発生の話と共に「ボランティア」という観点から阪神・淡路大震災と向き合った。

震災発生当時、関先生は大学院生だった。1月17日は修士論文の提出日だったそうで、先生はほぼ徹夜で書き上げ、丁度休憩を取っていたと

ころゴーという音が突然聞こえたそうだ。先生の住んでいた場所は大阪国際空港（伊丹）の近くだったので、最初は飛行機のアイドリク音だと思ったのだという。しかし、それにしては変だと思っていた。それに激しい揺れが始まった。揺れが収まり、本棚やテレビなどが落下し、部屋の中はぐちゃぐちゃになったそうだがそれ以上の被害はなく、先生自身もよくわからないまま仮眠を取ったのだという。

だが、阪神・淡路大震災の際には「ボランティア元年」と呼ばれるように数多くボランティアが活動に当たった。今までの災害とはどのような点が違っていたのだろうか。関先生によると特に被害の大きかった地域というのは、東に行けば大阪、西に行けば明石といったように普通の生活をしている街に囲まれた場所であったため、ボランティアがアクセスしやすい環境にあったのが特徴だという。また「多くの大学生が休みに入る時期であったこともボランティア活動の盛り上がるきっかけの一つになっていたのではないかと関先生は分析している。実際、ボランティア活動に参加した年齢層を調べても20代で初めて参加したという

人が多かったそうだ。しかし、そうなるも阪神・淡路大震災の発生がたまたま条件に重なっただけという見方もありうる。なぜ、今に至るまでボランティア活動が様々な場面で生まれているのだろうか。これについて関先生は「ボランティアが人々の認識の中で常識になったからではないか」と話した。阪神・淡路大震災以降、様々な災害が起こる中でボランティアと災害が結びつくようなメディア報道が増えたことや、NPO・NGOの普及により「何かしたい」という思いを持つ人々を受け入れる受け皿が整ったこと、そして科目としてボランティアを「教える」ことが出来るようになったことが人々の認識の中に「ボランティア」を定着させたのではないかと関先生は考えている。

では震災から20年が経ち、すっかり生まれ変わった街々の「復興」は終わったのだろうか？もうボランティアの助けはいらないのか？その疑問を最後に関先生にぶつけた。それに対して関先生は「確かに時間が経ち、復興は進んだかもしれない。だが、まだ立ち直れていないと自分自身の中で考えている人がいるならば寄り添うべきである。私たちは『立ち直らなきゃ！』と言うのではなく、立ち直りたくても立ち直れない人に関心を寄せていかなければならない」と答えた。

震災から20年。もちろん辛く悲しい記憶ではあるが、その中で「ボランティア」という活動が生まれてきたのも事実である。数多くの災害が起きるたびに被災者の生活の、そして心の支えとなってきた多くのボランティア活動の基礎は20年前のこの地にある。このことを改めて考えると共に、人と関わることの必要性というものを私たちは認識していかなければならないのかもかもしれない。



「震災がボランティアの源流を作った」と話す関先生

最大の防災は人とのつながり —松原徹さん—

地震が発生した当時の状況を
を知るため、本学出身で地震
発生時も現在も西宮市甲東園
に在住している松原徹さんに
話を聞いた。松原さんは震災
発生時、自宅2階の寝室で妻
と共に就寝していた。ドーン
という大きな音で目が覚めた
が、下手に動く危険なと思
い揺れが収まるまでじっと
待ったという。妻と息子と3
人で、必死の思いで階段を降
りると、捻じ曲がった扉のせ
いで1階で寝ていた娘が閉じ
込められていることに気がつ
いた。松原さんは当時を「ま
さに火事場の馬鹿力で扉をこ
じ開けた。すると娘は幸いな
もピアノのおかげで落ちてき
た天井の下敷きになっておら
ず、無事だった」と振り返
った。娘を救出した後、家の外
に出た松原さんは隣に住む1
人暮らしの年配の女性の様子
が気になり、声をかけに行くと、女性はお風呂場に閉じ込
められていた。揺れの衝撃で
バスタブが飛び出してできた
空間を利用し、いつ家が倒壊
するか分からない状況の中、
近隣の人々と協力してリレー
形式でお風呂場に入り、女性
を救出した。その後も松原さ
んは賢明に声をかけて回った
が、アパートの大家、新聞屋
の主人、友人の母など、多く
の人の死を目の当たりにした
という。

松原さんの家は全壊してお
り、その日からはガレージに
預けていた自家用車に乗り込
み、家族全員で眠った。松原
さんは「幸いにもこの期間中
雨が降らなかつたのが唯一の
救いだ」と話す。後日、
新幹線もバイパスも落下して
いたため、救援に駆けつけた
人々は西宮駅から歩いて家ま
で来てくれたという。幸運に
も無事であった向かいのマン
ションの一室を借りられるこ
とになった松原さんは、倒壊
した家から荷物を運び出した
時を振り返り「私は小さい頃
から切手を集めるのが趣味
で、その時家族が、まずはお
父さんの切手を一番に救おう
と言ってくれた。その時取り
出された100冊余りのアル
バムは、今でも宝物になって
いる」と話した。

余震が続く中、配管が外れ
たせいで漏れたガスの匂いが
街に充満した。いつ引火する
か分からない状況で、一般
人がカメラを持って興味本位
で街の様子を撮影しにくるよ
うになっていた。映像を撮りに
来た一般人がタバコを吸うの
で、その火がきっかけになり
火事が起きては困ると松原さ
んは男手を集め、火消し警備
に当たったという。また、冷
蔵庫などの電化製品から引火
する可能性もあったため、プ
レーカーを落とすようにとも
呼びかけた。

当時の混乱について松原さ
んは「半壊して開きっぱなし
の家から物が盗まれたり、市
のアンナンスで被害にあった
宝石店などの金品を狙った関
東方面からの窃盗団が来てい
ると伝えられたりした。非常

に不安だった。1番困ったの
はとにかく水。一軒だけ井戸
水が溢れ出ていた家があった
ので、皆がバケツを持って汲
み、トイレに使っていた」と
振り返った。

緊迫した状況が続く中、
1番嬉しかったことは、支
給されたちらし寿司と豚汁
だったという。これについ
て松原さんは「とにかくずつ
と興奮していたので喉に通
りやすいちらし寿司は本当
にありがたかった。1月の
寒い時期だったので、魔法
瓶に入った豚汁は非常にお
いしかった」と微笑みなが
ら話してくれた。

松原さんは震災後すぐに知
り合いの建築業者に頼み家を
再建した。二度と忘れられな
いような恐ろしい体験をした
場所に、もう一度家を建てる
のは抵抗がなかったのかとた
ずねると松原さんは「家族を
亡くされ、悲しい思い出を
できるだけ思い出したくないと
西宮を出て行く人もいた。自
分の家族が全員無事であるこ
とに改めて感謝した。この場
所に留まると決めた理由は、

娘の生まれ育った所を大切に
したかったからだ。娘の友達
はもろろん、自分自身の思い
出が詰まったこの場所を離れ
るのが寂しかった」と答えた。
被災後の防災対策について
たずねると、松原さんは中に
住所と氏名が書かれた紙が
入った筒を見せてくれた。い
ざという時に助けを呼ぶ際、
声が出なかつたり声が届きに
くい場合があるので、筒があ
ると便利だという。他には6
本以上のペットボトルの水、
非常食や懐中電灯など、いつ
でも持ち出せるように常備し
ている。



当時の写真を眺める松原さん

～震災を映す「鏡」を “今”に伝える～ —大学図書館 浅沼寛治さん—

皆さんは大学図書館に行く
際に入り口にあるガラス張り
の展示スペースを日頃気にし
たことがあるだろうか？ここ
に今、阪神・淡路大震災から
20年に合わせた特別展示「阪
神淡路大震災から20年 あ
の日を忘れない」が行われてい
る。今回の展示の意味、そこ
に込められた思いについて大
学図書館運営課の浅沼寛治さ
んに聞いた。浅沼さん自身も
神戸市須磨区で育ち、小学生
の時に阪神・淡路大震災を経
験している。

今回の特別展示について浅
沼さんは「震災の事を知らない
学生も増えてきたため、震
災当時の本学周辺の様子を
知ってもらうために企画し
た」と話した。浅沼さん自身
も中学生に図書館を案内した
際、全員が95年以降の生まれ
で誰も阪神・淡路大震災を実
際に経験していないと答えた
経験があったそうで「二度、
阪神・淡路大震災についての
企画を行わなければならな
い」と思ったそうだ。



「震災の記憶を忘れないでほしい」と話す浅沼さん

「2日でも早く利用者に学習
の場を提供したい」という思
いを胸に、度重なる余震の中
職員が復旧作業にあたったこ
と、発生から1ヶ月後の2月
13日には全面復旧にこぎつ
けたことなどが分かるように
なっている。

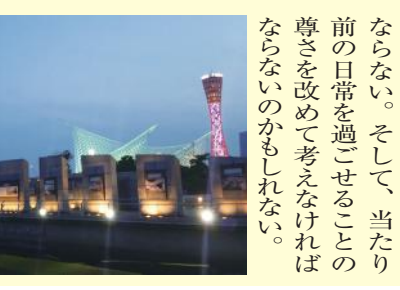
今回の企画を通して浅沼さ
んは「20年前の阪神・淡路大
震災はこの地域における重大
な出来事。大学図書館として
もその事を伝える責務があ
る」と語った。

記者席

震災が発生してから、すで
に20年の月日が経った。神戸
の街は今、震災の傷跡のない
強く、美しい街に生まれ変わ
った。そして街には、20年前
あの日に何が起きたのかを知
らない若者が多くみられるよ
うになった。いまや、多くの
教科書で「歴史的な出来事」
として書かれるようになった
阪神・淡路大震災。あの震災は、

多くの人々の当たり前の日常
を奪い、多くの人々に悲しく、
つらい記憶を与えた。しかし、
時間が経つにつれ、人々の記
憶からは「あの日」の出来事
は薄れている。また、この20
年という時の流れの中で「震
災を知らない」世代が増えて
いるのもまた事実である。あ
の忌まわしい記憶も時の砂の
中に埋もれつつあるのかわし
れない。

「あの日に何が起ったのか。そしてそこから人々がど
んな思いをもって立ち上がった
のか」ということを



見つめなおし、そして後世
に語り継いでいかなければ
ならない。そして、当たり
前の日常を過ごせることの
尊さを改めて考えなければ
ならないのかもしれない。

また、浅沼さん自身も震災
を経験しているが「20年の時
では震災当日の新聞記
事や震災関係の書籍
そして生々しい写真の
一部などが展示されて
いる。また、震災当時
の本学図書館の様子に
ついて書かれたパネル
も掲示され、震災が発
生したのが早朝であつ
たため人的被害はなく
書架の倒壊、図書落落
下といった被害のみで
あったこと、そして定
期試験前であつたため

震災から時間が経ち、記
憶の風化、そして震災を知
らない世代が増えていく中
で当時の新聞や書籍はいわ
ば震災があつたことを映す
「鏡」である。彼らは今日
も、図書館の入り口で私た
ちに語り掛けていることだ
ろう。あの震災の記憶を。

「罪の言」

人はそれぞれ事情をかかえ、
平然と生きている

伊集院 静

気分が暗くなり、落ち込む瞬間がある。友達とケンカをした、恋人との関係が上手くいかなかった、テストの点数が悪かったなど、落ち込む理由は人によってそれぞれ違う。猛烈な孤独感を感じ、自

分だけが周りの人より劣った存在であると思いついてしまふことがあなたにもあるであろう。
人間関係が希薄化し、常に競争を強いられる現代の日本人の中に「自分だけが皆より

劣っている、つらい目にあっている」という感覚を持った人は本当に多い。
そんな現代病とも言える劣等感や孤独感を持つ人々にとって作家伊集院静氏の「人はそれぞれ事情をかかえて、平然と生きている」という言葉には強烈に心を揺さぶられる。

確かに自分が落ち込んでいる時に周囲を見渡すと、自分以外の人はみんな幸せで、自分だけが辛いのだと感じるかもしれない。けれども人の本心というものは本人にしかわからない。見かけをどのように振舞っていたとしても、目で見たものがその人の心情の全てでは決してない。だがあなたが平然を装いながら孤独や痛みを抱えているのならそれは同様に周囲の人も痛みを抱え、しかし決してそれを表に見せず平然とした表情で日々を生きているということ

のなによりの証明になる。伊集院氏の一言は当たり前だが、普段忘れがちになるこの事実を私たちに思い出させてくれる。
あなたが普段人前に出せない孤独や劣等感を受け入れ、「皆同じなのだ」と心から思えたとき、必ず1人の大人として成長することが出来る。伊集院氏の一言は、そのために必要な気づきをあなたに与えてくれるだろう。

教授の背中

高島千代

法学部 教授



今回紹介するのは法学部の高島千代先生である。先生は日本政治史を担当している。中でも自由民権運動の激化事件、特に秩父事件を研究している。秩父事件は1884(明治17)年に秩父の養蚕農民が起こした武装蜂起である。農民が武器を持ち、国家の軍隊と戦うということは並大抵のことではない。そのような状況の中、農民たちは何を考えていたかに強い関心を抱いているという。

また、江戸時代ではまず「お上の政治」が存在して、その中で自分の役割を探すということが当たり前であった。しかし、近代社会への移行期に、そのことがひっくり返った。国民が国家を考えて創り出すことをよしとする考え方が生まれたのだ。先生はその政治的意識の変化を、歴史を通じて理解出来れば、と考えている。

先生が幼いころに住んでいたイギリスでは公園で一般の人が演説をしていたそうだ。このような姿は日本では考えられない。その違

日本政治を考える

いから日本での政治の価値の低さに気付いたという。また、学生が友人同士で政治について語り合わないという現状がある、と日本の政治を語る文化の希薄さを嘆いた。「日本政治史には良い歴史がある。それはごく身近な所に存在している。そのような歴史を知ってほしい」と述べた。

学生時代、先生はよく旅行に行っていたという。そのときはユースホステルを利用したことで、多くの人々と出会うことが出来た。そのことで度胸がつき、知らない人から署名を集めたり、議論をしたりすることが出来るようになった。授業はきつかけに過ぎない。それを通じて自分のやりたいことを見つけよう」と話した。

今の学生は江戸時代の人々のような枠に嵌った生き方をしているのではないかと「科目やカリキュラムなど、もっと自分たちで考えて提案してほしい。自発的に動くことが大切なのだから」と学生に助言する。

関学ヒストリア

「神戸三田キャンパス」

関西学院の未来を担う

今回は、2015年の春に開設から20周年を迎える神戸三田キャンパスについて紹介したい。

神戸三田キャンパスは、1995年に神戸国際公園都市に開設された。それと同時に総合政策学部が、1999年度には大学院総合政策研究科が開設された。また、2002年には1961年に創設された理学部が移転、さらには理工学部と名称が変更された。

計画の当初、神戸三田キャンパスはテーマとして「恵まれた自然環境を生かした緑豊かなキャンパス空間の創造と上ヶ原キャンパスのイメージの継承」ということが掲げられた。選ばれた敷地は、周辺を山々に囲まれ、自然豊かな場所である。また、キャンパス内の各棟は、上ヶ原のものと同様スパニッシュ・ミッションスタイルが採用されている。こうして、総合政策学部の基本理念である「自然と人間の共生」「人間と人間の共生」

が実現された。もともとは国際関係学部を上ヶ原校地に開設することが検討されていた。しかし、校地面積の問題からはほとんど不可能であり、すなわち新校地利用は苦渋の選択であったのだ。また、当時の文部省から国際系学部の増設を却下されたため、社会科学系学部への転換を余儀なくされるなど、すべてが思い通りにはいかなかったようだ。こうして幾多の苦難を乗り越えて、神戸三田キャンパスは開設に至った。まだまだ歴史の浅いこのキャンパスが今後どのような発展を見せてくれるか、注目である。

「国会期成同盟発祥の地」建碑30周年の集い(仮)
1880年3月に大阪・太融寺で結成された「国会期成同盟」の顕彰碑を囲み、日本の「下からの民主主義」の歴史について語りあいます。
日時：2015年5月3日(日)
場所：太融寺(大阪府大阪市北区太融寺町3-7)
内容：「国会期成同盟発祥の地」碑前での式典や講演会を計画しています。
詳細は高島(法学部)まで。

たかしま ちよ	
1990年	京都大学法学部卒業
1999年	名古屋大学法学部博士号(法学)取得
1999年	本学法学部専任講師(日本政治史)就任
2002年	本学法学部助教授就任
2007年	本学法学部教授就任

神戸三田キャンパス 年表	
1993年9月22日	神戸三田キャンパスにおいて総合政策学部新築工事起工式を挙行
1995年3月16日	神戸三田キャンパス竣工式
4月1日	総合政策学部を設置
2002年3月16日	理工学部・相互政策学部新学科開設記念式典
2005年6月7日	神戸三田キャンパス解説10周年記念式典





K.G. studio

今回のOBインタビュー「タイムスリップ」では、Good Standard Design 兼Darts Crew Spaceを運営されている松尾英俊さんに学生時代や現在に至るまでの経緯を聞きました。「K. G. PEOPLE」では、西宮市大学交流協議会大学連携学生プロジェクトチーム(通称NCP)に所属する浅野長嗣さん(社・3)に過去の活動やNCPへの思い入れについて聞きました。

K.G. PEOPLE

10. 西宮市大学交流協議会 大学連携学生プロジェクト 浅野 長嗣さん (社・3)



今回は、西宮市大学交流協議会大学連携学生プロジェクトチーム(以下NCP)に所属する浅野長嗣さん(社・3)を紹介する。

浅野さんは先輩からの紹介でNCPを知り、自身が18年間住んでいる西宮市について様々な情報を発信したいと思っただけで、この活動に参加する決めたことになったという。最初の1年は西宮市の他の大学生と知り合いになり、お互いの大学事情を共有できてとても刺激的だったそうだ。

NCPは、西宮市内の大学に通う大学生と地域の交流を図るために事業を行っている団体である。浅野さんは先輩からの紹介でNCPを知り、自身が18年間住んでいる西宮市について様々な情報を発信したいと思っただけで、この活動に参加する決めたことになったという。最初の1年は西宮市の他の大学生と知り合いになり、お互いの大学事情を共有できてとても刺激的だったそうだ。

所属2年目となった昨年、NCPは12月7日にJR甲子園口のほんわか商店街で「TOP」 という地域の方と西宮市内の9つの大学、短大の学生との交流会を催した。事前準備として協力してくれる商店の経営者の方と話し合いを重ねたそうだが「商店側の要望や学生からの希望といったさまざまな視点を踏まえながら、企画を作り上げることに苦労した」と浅野さんはその時の様子を振り返った。

そして、当日の前半は商店街主催の歩行者天国のイベントの手伝い、後半からは商店街内の8店舗で他大学の大学生同士の交流会を行った。普段は関わりが少ない地域の人達や他大学の学生と交流する場となり、新しい価値観を得たり視野を広げたりする機会になったそうだ。参加者の反響も良く、「無事に開催出来て良かった」と浅野さんは笑顔で話した。

NCPは現在、大学生の目線で西宮市をアピールしようとしてフリーペーパー「Cs(シーズ)」の作成も行っている。西宮市に眠る沢山の魅力を伝え、多くの人に知ってもらいたいことが浅野さんの目標なのだそう。

NCPの来年度の活動は4月に始まる。地域交流に興味のある方や他の大学生と交流を図ってみたい方は参加してみてもどうだろうか。

タイムスリップ 第11回 松尾 英俊さん (00年卒)

今回取材したのは、Good Standard Design 兼Darts Crew Spaceを運営している松尾英俊さん。学生時代の思い出と現在の活躍について熱く語った。

私は、GSDという関学正門から直進したところにある店でオリジナルTシャツのデザインの制作、販売をしています。しかし、大学入学当初は自分がTシャツを作るなんて全く思っていませんでした。

関西学院大学はとてもしっかりイメージがあり、あこがれていました。そこで関学に入るなら最も偏差値の高いところに入ろうと経済学部へ入学しました。1回生から軽音サークルに入りました。4回生の時の文化祭で、時計台前で歌ったのを今でもよく覚えています。

もともと、軽音サークルに入っていたこともあり、音楽業界に興味がありました。しかし、4回生時に就職活動を辞めたため、半年間はコンサートスタッフのアルバイトなどを経験しました。その後東京にある音楽代理店に就職することができました。しかし、2年後には勤務に耐えられず退職し挫折感を味わいました。そこで、以前働いていた飲食店で再び働くようになった。

また、飲食店で働いていた時にダーツにのめり込みました。そのため、今では学生さんのTシャツ制作だけでなく、プロのダーツ選手のユニフォーム制作も手掛けています。今ではダーツ業界でシェアNo.1で日本中からウェア制作の依頼がきます。そして、店内にはオンラインダーツやダーツのパーティを設置しています。

最近ではユニフォームを作る機会が減ってきているかもしれませんが、しかし、部活動やゼミ、サークルなどみんなと同じユニフォームを着ることによって団結することができるといって、是非学生みなさんにも感じてほしいです。



松尾 英俊 (まつお・ひでとし)

1997年に関西学院大学経済学部に入學、2000年に卒業。2002年に音楽代理店に就職した後、2014年にGood Standard Design 兼Darts Crew Spaceの経営を始め、現在に至る。

文芸部 読み切り小説 「十球だけの名投手」 阿武川 素粒子

「前回までのあらすじ」プロ野球の播鉄レオポルズに所属する兄口到(あにぐちいたる)は、高卒四年目の冴えない投手だった。だが、オーブン戦前に甲子園の怪物・まもり君と契約したことで、一試合十球限定で絶対に打たれないレジェンド・ナックルを手に入れる。その怪物を武器にピンチ時のワンポイントとして、十二試合連続無失点記録を樹立した。今日も二点リードの九回裏二死満塁の局面で登板。すぐに終わると思われたが、長野ドリムアンツのくせ者・相模に粘られてしまい……。

レジェンド・ナックルはあと一球だけ使える。しかし、それを打たれたら終わりだ。俺は並の投手になってしまう。「まもり君はイモリ特有の線型の瞳孔を相模に向けて、自身も乗っているボールを踏みならす。俺は彼に一瞥してから自分なりに言い聞かせる。」

「絶対に、絶対に打たせない」レジェンド・ナックルをグラブの中で握る。人差し指から小指の爪を手の甲につけ、指にボールを乗せる。親指を縫い目に合わせて完成だ。この特殊な握りは俺しか出来ない。あとは無駄な力を抜いて、流れるように投げるだけ。せせら笑う相模のバットにすらすらと投げた。ワンバウンドになるギリギリの低めに投げ込む。空気抵抗を受けて揺れ動く球を、相模は打とうとする。バットに当たると、空振り！ところが、相模は瞬時にバットを下げて当ててきた。打球はホームベースに当たって無情にもファール。初めて一人の打者だけで十球を使い果たしてしまった。

「もうアイツを歩かしちゃお」怪物の囁きに乗っても、ルール上では俺に失点がつかない。でも、相模の次の平島は先月9ホームランの強打者だ。130キロそこそこストリートと逃げるスライダで打ち取れる相手じゃない。

だからと言って、他人に運命を託すのはもったいなくて嫌だ。球団タイ記録に是非も並ぶたい。破裂しかけの鼓動を抑えようと、ロージンバックを持ち上げて間を取る。フルカウントじゃなきゃ、逃げるスライダが使えるのには、いや、待てよ。打者との勝負から逃げてもいいのだ。ランナーを殺せば試合が終わる。この局面で一番緊張しているのは、同点のランナーである二塁の片倉だ。足が遅いから余計に二塁から離れているはず。これはチャンス！すぐに二塁牽制のサインをこっそり送る。きっちり静止したまま三塁走者を見るや否や、プレートから右足を外して二塁牽制。油断していた片倉は戻り切れずアウト。バッテリーと二塁手以外は、呆然とした表情でゲームセットの声を聞いた。

ロッカールームにて、タオルで顔を覆い隠した俺は長椅子に寝そべる。今日は上手くいったが、次は同じ手が使えない。「次は球団新記録だね、イタル」怪物の囁きのため息に近い相槌を返す。このまま俺は十球だけの名投手を続けていくのだろうか。底が見えぬ不安が俺を染めていった。



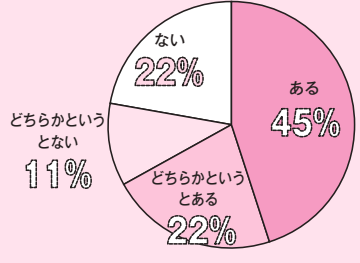
留学TIMES



みなさんは、留学に対してどのような印象を持っていますか。行きたいと思っても、なかなかその一歩を踏み出せない方も多いのではないのでしょうか。今回は、留学について特集します。留学への印象が変わるかもしれませんよ。

100人に聞きました!

Q1 留学に興味はありますか?



Q2 どここの国に留学に行きたいですか?

- 1位 **カナダ**
- 2位 **フランス**
- 3位 **アメリカ**

なんで?

- ♥カナダ…治安が良い
協定校のレベルが高そう
- ♥フランス…おしゃれ
食べ物がおいしそう
- ♥アメリカ…世界の中心だから
人種のるつぼ

基本DATA

1位 CANADA

第1位に輝いたのは、世界2位の面積を誇るカナダ。人口の半数は移民で占められているといわれ、国際色がとても強い。そのため外国人にフレンドリーで温かい人が多く、自然豊かで治安もいいために留学生に特に人気が高い。

また、たくさんの大学が日本の大学と提携しており、留学のための学習環境はとても整っている。広い国土には 他民族で様々な人種であふれる首都バンクーバー、活気のある中心都市トロント、最も美しい街並みとされるピクトリアなど都市ごとにそれぞれに様々な魅力がある。ぜひ気候や地域の特色をリサーチして、自分に合った都市を選んでみては?



国際学部 2回生
井坂 絵美さん

私は昨年8月、カナダに1ヶ月間留学しました。ホームステイで、午前中は学校に通い、午後はカナダで出会った友達と毎日トロントを散策しました。学校が企画するフィールドワークが思い出深く、そこで見たナイアガラの滝は圧巻でした。

トロントに留学したい人は、定期券やバスを使っていろいろな所を散策してみてください。駅によって街の個性が異なり、面白いですよ。

2位 FRANCE

第2位に選ばれたのは、美しい街並みに心奪われるフランスだ。フランス語は言葉の響きが良いだけではなく、2億人以上の人々が話す公用語で、習得すれば魅力的なスキルになるに違いない。

「花の都」パリは留学先としての人気は圧倒的で、大学の数も多い。

このおしゃれな街で学べば、その後のかけがえのない経験になるに違いない。

3位 AMERICA

第3位に選ばれたのはアメリカ合衆国。世界の教育や研究、さらには文化をリードするアメリカには、世界中から学生が集まり、そのサポート体制は大変充実している。また、2年制大学、4年制大学、大学院にいたるまでたくさんの大学を国内に有しているため、学生のニーズに合わせた教育を受けることができる。語学だけに留まらない濃厚な教育を受けられるのはアメリカならではの魅力だ。

~Q&Aコーナー~



本学の様々な留学プログラムや国際プログラムを提供する国際教育・協力センター(CIEC)にお話を伺いました。

Q1 留学の基本的な種類とその特徴は?

1ヶ月から1年間の留学が一般的です。短期は長期休暇中に行くことができるため、授業などを気にせずに学習することが可能です。留学の入門編として最適です。

中長期留学は深く学ぶことができますが、渡航が学期中のため留学前に必修科目など計画的に履修する必要があります。

Q2 人気の留学先は?

アメリカやカナダなどの英語圏が人気です。他には国が密集していてさまざまな国に旅行できるヨーロッパ、中国語と英語を両方学べる台湾なども人気です。

Q3 留学前にしておいた方がいいことは?

やはり語学学習を欠かさないことです。外国に行ってから困らないように、日本でできることは日本でやっておきましょう。

日本についての学習は、現地に興味を持つ学生も多く、会話の種にもなるのでしておいた方がいいでしょう。

Q4 外国語に自信がないけど留学しても大丈夫?

モチベーションがあれば大丈夫です! どんどんチャレンジして下さい。選考時にTOEFLの得点を加味しない留学プログラムも本学では開講しているので、ぜひ積極的に挑戦して下さい。

Q5 留学について情報をどう集めればいいのか?

まずはCIECに来て下さい。また、CIECのメールマガジンや、webサイトも参考にしてください。

また、グローバル人材を目指す関学生のための留学フェアを開催しているので、ぜひ参加してください。

Q6 留学で失敗しないためには?

留学先で自分の理想と違うことが起こっても、新しい目標を作り、路線変更することです。留学で思ってもみなかったことが起こるのは当然なので、いかに異文化に適応していくかが大切です。

関学神戸三田キャンパスから一番近い教習所

● 取得できる車種 ●

- 大型車・中型車・普通車(AT/MT)・
- 大型二輪車(AT/MT)・普通二輪車(AT/MT)

お申込みは、大学生協サービスカウンターにて受付できます。



兵庫県公安委員会指定
三田自動車学院

三田市志手原1147-1 TEL:079-562-2995
E-mail:sanda-as@poppy.ocn.ne.jp HP:www.sas-menkyokaiden.com

